



## JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

### 第43回 日本語教育方法研究会

藤女子大学

2014年9月6日(土)

9月6日に藤女子大学(札幌市)で第43回研究会を開催いたします。今回は夜の懇親会の代わりに昼食交流会を企画しました。涼しい北海道で、北海道のおいしい食べ物を食べながら、自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第43回研究会開催について

日時 :	2014年9月6日(土)
会場 :	藤女子大学北16条キャンパス
開催委員 :	副田恵理子(藤女子大学) 小河原義朗(事務局:北海道大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付(発表者・一般) ポスター貼付	1:45	昼食交流会終了
10:00	開会の挨拶	2:00	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	3:10	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:40	ポスターセッション終了
11:10	ポスターセッション開始	5:00	講評
12:40	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付		次回開催委員挨拶
12:45	昼食交流会開始		閉会の挨拶 参加者全員で片付け

### 【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入(p.9参照)にご協力ください。

新規入会 : 3,000円(年会費)

当日のみ参加 : 2,000円

## 【プログラム】

### 【午前の部】

#### ●口頭発表（5件）

##### 1. 中国人大学生の日本語教育への課外活動の有効性について

王尤（京都外国語大学大学院生）

中国の大学は従来の授業で日本語教育の高度化を目指して努力し続けている。そこで、更に効果を上げるために他の有効な手法がないか、検討することを試みた。「自発的に参加する日本文化活動が日本語学習に良い影響を与える」と仮定し、中国の大学における日本語専攻学生 16 名を対象とし、調査を行った。日本人教師との空手道活動を集中的に行い、学生の参加前と参加 1 年後の成績順位やモチベーションの変化を考察した。それによって、課外活動が学生の日本語能力向上に寄与するかどうかを明らかにし、その理由と応用展開の可能性について提言したい。

##### 2. 論文作成指導を受けた日本語学習者は添削指導から何を読み取るのか—日本人大学生と比較して—

本間妙（中部大学）・山本裕子（中部大学）・小林律子（東京福祉大学）

日本語で論文作成をする必要のある上級レベルの日本語学習者（NNS）にどのような指導が効果的であるか検討するため、論述文の添削評価に対する「気づき」を分析し、日本人大学生（NS）と比較した。添削評価を内容面と形式面に区別すると形式面よりも内容面を重視しているが、問題点の理解度は形式面の方が高いという全体的傾向は両者に違いはない。しかし問題点に対する気づきは NNS が NS よりも高く、NNS は論述文作成で意識すべきポイントを理解している。これは論文作成に関して半期間学んだ成果と考えられる。一方で「考察の深さ」等、局所的な訂正では改善しない全体に関わる項目では理解が不十分であり、指導の難しさが示された。

##### 3. 読解から対話による理解へ—日本語母語話者と日本語非母語話者との協働から—

中村諭実子

本研究は、日本語母語話者と上級日本語非母語話者の大学院生 2 名が新聞記事を各自で読み、その記事の要約と自分の考えをまとめた後にディスカッションを行った。この一連の活動から、上級日本語非母語話者にはどのような課題があるか、両者の読解過程の特徴、および協働による対話活動により理解内容が変容した過程について分析した。その結果、読解力と伝達力を高めるためには、自己内対話と協働による対話活動によってモニタリングを促進し、理解内容の再構築を図り、説明力を高めることがより精緻な内容理解に重要であることが示唆された。

##### 4. 学習リソース情報共用データベースを活用した学習支援

黒田史彦（早稲田大学）

自己主導型学習に取り組もうとする学習者を支援する際には、個々のニーズやスタイルに即した学習リソースに関する情報提供が不可欠である。そこで、学習支援に携わっている支援者の「拠り所」となり得る共用 WEB データベースの無償公開を始めた。データベース利用者（支援者）は、支援対象となる特定の言語技能や言語要素などを手掛かりに学習リソースを検索し、多様な支援現場においてリソース情報を有効活用できる。また、支援者が自らの支援実践において利用したリソース情報を追加登録することにより、互助的な「知恵の持ち寄りシステム」としてデータベースを増強できる。本発表では、このデータベースを活用した学習支援の可能性を提案したい。

##### 5. 非漢字圏学習者に対するやさしい日本語による読解支援のあり方

金庭久美子（立教大学）・川村よし子（東京国際大学）

本研究の目的は、日本語学習者をはじめとする日本語弱者へのやさしい日本語による読解支援システムの構築にある。文章の難易度に影響を及ぼす要素としては、語彙の難易度、文の長さ、構文の複雑さ等があげられる。これまで語彙の難易度に着目し、中級以上の単語を初級の単語に置き換えることで文をやさしく書き直すことを目指してきたが、やさしい単語に書き直しても、文の意味理解に効果が見られない場合もあった。そこで、非漢字圏学習者を対象に単語の書換えのわかりやすさを比較する検証実験を行った。実験結果をもとに、やさしい日

本語による書換えが有効な場合と、書換えが不要な場合を分析し、今後の読解支援の在り方について提言を行う。

●ポスター発表（上記5件を含む14件）

6. 中国において日本語の使役表現はどのように指導されているのか—教師に対するインタビューを通して—  
王慧雋（早稲田大学大学院院生）

中国で学ぶ日本語学習者には文法の知識を有する者は多いが、習った文型・文法項目を適切に用いてコミュニケーションができる者は少ない。このような現状を引き起こす教授法の問題の所在を探るために、本研究は使役表現を例として取り上げ、使役表現に関してどのような指導を行っているのかについて中国の大学日本語専攻生に指導する教師18名および民間日本語学校の教師8名にインタビューを実施した。調査の結果、場面を欠いた単文の例示やモデル会話文を模倣する会話練習に終始することが多く、使役表現が具体的な状況や人間関係の中でどのような表現意図をもって使われるかを理解させる「文脈」の指導が十分に行われていないことが分かった。

7. 談話における「でしょう」の機能

太田悠紀子（エジンバラ大学大学院修士）

本研究では、日本語のトーク番組の談話における「でしょう」の機能を考察する。「でしょう」は、「確認」をしながら、同時に会話を展開させるなど他の機能も果たしている。多くの日本語教科書では、「でしょう」の推量の用法がよく紹介されているが、確認についてはまったく扱われないか、扱われたとしてもその例や説明は不十分である。確認の「でしょう」は、色々な談話の中で示されるべきであり、それにより学習者が「確認」を通しての「でしょう」の色々な機能を理解することができると考える。

8. 使役文指導に関する一考察—初級日本語教科書と話し言葉コーパスの調査を通して—

木下祐子

この研究は以下の3つのリサーチクエスチョンを明らかにし、日本語教育における使役文の指導方法を提案するものである。調査には初級日本語教科書と話し言葉コーパスを使用し、それぞれの特徴を比較した。1. 初級日本語教科書で扱われている使役文はどのようなものか。2. 現実に使われている使役文はどのようなものか。3. 初級の学習者にどのような使役を指導したらよいのか。調査の結果 1. 意味的には強制使役が典型として扱われている。2. 強制使役以外の用法が多く使われている。3. 被使役者は有情物だけでなく非情物も扱い、謙譲使役、再帰使役、使役形その他動詞なども紹介する。

9. 中級前半ディスカッションクラスにおける自己評価の取り組み

伊藤文（元パリ・ディドロ第七大学）

本稿では、フランスの大学における自己評価を取り入れたディスカッションクラスの実践報告を行う。自己評価を行う目的は、各自が学習目標を明確にし、自律的に学習を進めることである。学習者は毎回のディスカッションの前に、自己目標を設定し、実施後に自己評価（3段階評価および自由記述）を行った。授業後は教師がコメントを記入し、返却した。考察の結果、自己評価を通して、目標を明確化、意識化させてディスカッションに取り組みさせることができたと言える。また、学習者によっては、教師のフィードバックも活かし、建設的な自己評価ができた。その一方、抽象的な目標設定や内省に留まる者もあり、そのような学習者に対する教師の支援のあり方が今後の課題として残った。

10. 中国人日本語専攻学習者における学習動機の変動—転専攻した学習者のケーススタディー—

王俊（東北大学大学院生）

本稿は王(2014)に基づき、中国人日本語専攻学習者の中の転専攻に成功した学習者Kにおける学習動機の変動を詳細に分析した。その結果、学習動機の変動に次の四つの段階があることが明らかになった。1) 日本語学科に配属されたことに抵抗感がなく、「やってみよう」という気分で日本語学習を始めた積極的義務的動機、2) 次第に日本語に興味を持つようになった内発的動機、3) 学習内容が多くなるにつれ、大量の暗記にうんざりし、日本語を一時的に放棄した無動機、4) 転専攻に成功するために当分専攻である日本語の試験に合格しなければならないため、日本語学習を再度意識し、合格できるように努力している外発的動機。

#### 11. 留学生と日本人の合同クラスにおけるグループディスカッション内の観察—やさしい日本語の観点からの考察—

日野純子（東京福祉大学）

日本人と留学生が共に学ぶ合同クラスでのグループワークの中で、どのようなやりとりが起きているかについて、特に日本語力が言語障壁となり得る留学生への言語的支援がどのようになされているかについて観察、分析を行った。日本人が留学生からの要請に基づいて言葉や文化の説明をする積極的な支援の方向性と、時間の制約の中でそれらをあえて避ける消極的な方向性の二つが観察された。この二つの方向性が意味することについて「やさしい日本語」の観点から考察する。

#### 12. 内容と用途に応じた点字冊子の留め具と綴じ方に関する一考察—日本語能力試験（JLPT）点字冊子試験の問題冊子を用いた触読調査から—

藤田恵（立教大学）・河住有希子（日本工業大学）・秋元美晴（恵泉女学園大学）

本発表は、点字冊子の留め具と綴じ方を決定する際の留意事項を示すものである。点字文書の作成方法については研究が進められているが、綴じ方に特化したものは管見の限り見当たらない。そこで、JLPT 読解の問題を用いて、留め具が異なる点字冊子を作成し、点字使用者に対して使用感調査を行った。調査で用いた読解の点字冊子は、限られた時間の中で、複数ページに渡る文章を読み、問いに答えるためのものである。解答を得るために読み直すことはあるが、後日読み直すものではない。本発表では、一つの事例として作成した点字冊子の使用感調査の結果を示し、冊子の用途、内容の特性、使用者の特性などの観点から、様々な留め具の種類、綴じ方をどう選択するか考えを述べる。

#### 13. 「スキット活動」を取り入れた初級日本語クラスの実践報告—「発話促進」と「学習意欲の向上」の観点から—

鄭聖美・ブッシュネル ケード（筑波大学）

本稿では、スキット活動を取り入れた初級クラスの一実践を報告し、「発話促進」と「学習意欲の向上」の観点からスキット活動を考える。本実践では、モデル会話を通して設定場面に相応しい表現やスキルを学んだ後、ペアで創作スキットを作り実演する活動を、1学期に計8回行った。受講者は毎回積極的な取り組みを見せた。初回と最終回の実演の文字化資料を比較した結果、発話文に量的かつ質的な肯定的変化が見えた。授業終了時のアンケート調査からも、スキット活動による口頭練習および日本語学習への高い動機づけが認められた。学生が主体となって創作とプロセスに関わる点で発話促進と学習意欲の向上に効果があったと考えられる。

#### 14. 岡山大学全学日本語コース新カリキュラムに対する評価—留学生アンケート調査報告—

内丸裕佳子・坂野永理（岡山大学）

岡山大学の日本語コースでは毎年カリキュラムの見直しを行ってきたが、受講生の多様なニーズに対応するために大規模なカリキュラムの改編を行い、2013年度前期から新カリキュラムで授業を展開することとなった。その効果を把握するため、2013年度前後期末にアンケート調査を実施し、前期74名、後期78名の回答を得た。分析の結果、2013年度から新たに導入したトピック別科目の開講に肯定的な者が90%近く、本学の日本語コースに満足している者が80%以上おり、カリキュラム改編後の日本語コースに対する受講生の満足度が高いことが明らかになった。本発表ではコース全体に対する評価、各科目に対する評価、新規開講科目に関する希望について報告する。

## 【午後の部】

### ●口頭発表（5件）

#### 15. 学習者の日本語能力のレベル差を活かした授業の実践報告—年少者対象の場合—

河野あかね（つくばグローバルアカデミーつくばインターナショナルスクール）

日本語授業においては、クラス内に日本語能力のレベルが異なる学習者が混在することがある。特に、年少者の場合には、年齢による認知力や思考力などの発達段階上の理由から、学年や年齢を優先してクラス編成を行うことにより、クラス内の学習者間に日本語能力のレベル差が生じることがある。本発表では、このクラス内の学習者の日本語能力のレベル差を肯定的に捉え、同一教材を使用しながら、異なる課題目標や達成の期待値を設けたり、協働の学習活動を行ったりすることで、一人一人の日本語学習に対するモチベーションを高め、各学習者の日本語能力の向上を目指す授業に取り組んだ実践について報告する。

#### 16. 国際結婚移住女性への文字学習支援—多様な学習レディネスとニーズに着目して—

向井留実子（東京大学）・高橋志野（愛媛大学）・新矢麻紀子（大阪産業大学）

書字言語能力を獲得していない国際結婚移住女性の文字学習支援のあり方を検討するため、長期定住している国際結婚移住女性に対して書字能力調査や聞き取り調査を行い、学習レディネスとニーズを探った。その結果、生活に関わるごく基本的な漢字は習得されやすい傾向が見られるが、漢字が書けても、字形を分析的に見るスキルは養成されていないことも明らかになった。ニーズには、彼女たち自身が自覚しているものだけでなくまだ自覚のない将来に関わるものもあった。それらに応えるためには、レディネスを踏まえて、漢字知識の幅が広げられる力を身につける文字学習支援が求められる。

#### 17. 日本語教員養成のための反転授業の実践と学習者評価—「言語一般」から「言語と教育」まで—

篠崎大司（別府大学）

本研究は、日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツを活用して行った反転授業の実践報告である。授業に先立って講義資料を配布し、Moodle 上に構築した e ラーニングコンテンツを閲覧させることによって専門知識を提供するとともに、専門用語の理解と定着を促すためのチェックテストを予習とした。また、講義資料に関する質問を Moodle 上の投稿箇所から受け付けた。それを踏まえ、授業では質問に答えた後、講義資料準拠の4肢選択問題を解く一般的なアクティブ・ラーニングと、協働学習や問題解決学習などより高次なアクティブ・ラーニングを行うことで実践力の向上を目指した。なお、学習者評価の結果、75%の受講生が本プログラムに対し肯定的であった。

#### 18. 推測力・運用方法・運用能力を養う教材の効果—語彙マップからの意見文産出—

木下謙朗（東京福祉大学）・三橋麻子（首都大学東京）

初級から中級レベルへ移行期の学習者が持っている知的能力をいかして、推測し運用方法と運用力を養うことを目的とした教材の効果について報告する。まず、いくつかのトピックからテーマを推測し、それに関連した語彙を産出（推測）し語彙マップを作成し短文作成を行う。次にトピックに関する読解（聴解）を行い、使用されている語彙の共起表現や文型を学習し、本文の内容を要約する。最後に自分の意見を述べるために、新たに語彙マップを作成し、語彙、共起表現、文型を利用し意見文を作成した。その結果、これらの作業を繰り返すことで、意見文ストラテジーが身につく、意見をまとめ、詳細な説明が出来るようになるという示唆が得られた。

#### 19. リソースを活用して「書く」ための教材の開発

副田恵理子（藤女子大学）・小林ミナ（早稲田大学）

情報メディアの発達に伴い、文章を作成する際には、携帯電話の辞書アプリ、web 上の辞書／翻訳／検索サイトなど様々なリソースが利用されている。しかし、日本語学習者の場合、たとえ上級レベルの学習者であってもそれらのリソースを有効に活用できているとは言い難い。これは従来の日本語教育において、このようなリソース活用を「書く」教育のシラバスの中に積極的に位置づけていないことに一因がある。発表者らはこれらのリソースを上手く活用することも「書く」ためのスキルの一つであると考え、リソースを活用して「書く」ための教材の作成を試みた。本発表はこの教材開発の過程で得られた知見について報告する。

●ポスター発表（上記5件を含む14件）

20. 来日一年の中国につながる児童に対する日本語教育の実践報告—児童の学級参加を促すために必要な要因とは何か—

市川章子（横浜国立大学大学院生）

本研究は、来日間もない中国につながる児童に対して行った日本語教育の実践報告である。実践開始時は、学級内で日本語をほとんど話さない児童が、支援者との学習を重ねた結果、学級内で自信を持ち、担任教師に自ら質問するようになったり、得意な算数の授業で理解していることを表情に表したり、挙手をする場面が見られた。実践から、外国につながる児童に対して必要な日本語教育は、学習を教えるだけでなく、児童が安心して学習に取り組める場を作ること、母国の事情や母語を取り入れた学習の場の設定、ありのまま受け入れることであり、それが児童の学習にプラスの影響を与えていることがわかった。

21. 批判的思考力を養うための授業実践—留学生と日本人学生の混成クラスを対象として—

小林由子（北海道大学）

本発表では、留学生と日本人学生が「共に学ぶ」ことを目的としたクラスでの「批判的思考」養成を目指した授業実践について報告する。「批判的思考」の教育には、論理的思考を養うことを主な目的としたアプローチや「暗黙の前提」「論理の飛躍」など心理学的な観点から批判的思考を扱うアプローチがあるが、本実践では後者の立場をとり、グループワークでの材料の分析を中心とした活動を行った。留学生と日本人学生のグループワークにより気づきが得られた反面、留学生は語彙・文法など日本語そのものに注意が向けられる傾向があり、材料・活動・評価などについて今後も検討が必要であることが示された。

22. コースの目的と学生の学びは合致していたか—振り返りの自由記述をクラスター分析した結果から—

佐々木良造（秋田大学）

本研究は、振り返りの自由記述をクラスター分析した結果から、コースの目的と学生の学びが合致していたかどうか検討した。「参加者の協力による論点の広がり」というクラスターの解釈から円滑な意見の交換ができた学生がいたと考えられる。「話し合いの深まりへの気づき」というクラスター解釈から他者と協力して学習を進めていたと考えられる。この2点はコースの目的に適うものである。一方、参加者同士の関係性に着目したクラスターは「積極的な参加とピアな関係性の重要さへの気づき」、「参加者の協力による論点の広がり」など少数であった。この理由として、課題の指示文に具体的な振り返りの視点がなかったことが考えられる。

23. アウトプット重視の授業におけるディクトグロス導入の試み—中級前半のプロジェクトワークの準備として—

堀恵子（筑波大学）

本稿は、動画作成というプロジェクトワークを学期の最終成果としたタスク中心の授業においてディクトグロスを行った授業の実践を報告し、ディクトグロスを取り入れることの有効性を考察するものである。中級前半の学習者を対象とした授業において、ディクトグロスは文法に目を向けさせるだけでなく、動画作成に必要なグラフの説明、引用、ニュースの要約を学ぶための素材としても使用された。コース終了後、学習者によるコース評価とディクトグロスで産出されたテキストの分析の2点からコース設計を評価し、有効性を検討した。

24. 理工系留学生のための物理の基礎的専門語

小宮千鶴子（早稲田大学）

理工系の学部留学生は、日本人学生と同様に、大学学部入学前に高校卒業程度の物理の基礎的専門語を学習していることが学部教員に期待されている。基礎的専門語は、大学教育の前提となる重要な用語だが、そのうち一般日本語教育で学習するのは少数の用語に限られ、留学生は基礎的専門語などの専門語不足の問題を抱えている。本研究では、留学生が短期間に物理の基礎的専門語を効率よく学習するための学習語彙の選定を目的に、中学「理科（第一分野）」高校「物理Ⅰ」「物理Ⅱ」の教科書26種を資料として索引に掲載された物理用語1816語から各科目の半数以上の索引への掲載を条件に、476語を学習語彙として選定した。それらは全体の約26%に相当した。

## 25. 言語景観に着目した漢字テキスト作成の実践と課題

鎌田美千子 (宇都宮大学)

近年、大学教育では、学生自身が主体的に考えて思考・判断・行動できるようになることを目指し、従来の講義型授業からの転換が図られている。本研究では、このような主体的な学びを実現する試みの一つとして、日本語教授法の授業に PBL(Project Based Learning)の手法を援用し、身の回りの様々な標示や看板などの言語景観を素材とした漢字テキストを作成するプロジェクトワークを行った。(1)課題解決に向けた話し合い・準備、(2)テキスト作成、(3)グループ発表、(4)ふり返りを主軸とした授業設計により学生相互の工夫を共有することが可能となり、これらを通した学びを次に生かそうとする姿勢が顕著に見られた。写真の活用に焦点をあてた本実践の成果と課題を報告する。

## 26. 第二言語による発話データの質的分析の試み—日本語学習者のインタビュー調査から—

権藤早千葉 (久留米大学)

日本語学習者に対して行ったインタビュー調査結果を質的に分析するためにコーディング作業を行った。インタビューは 50 名に対して半構造化方式で行い、文字化データを分析した。インタビューは第二言語である日本語を用いて行ったことから、回答の発話量や内容が質、量ともに不足していた。そこで、データ全体から段階的な概念抽出作業を行った。まず回答から中心的な発話を抜き出し、その中から代表的な意味を表す言葉や表現を選ぶ。次に、それらの言葉の中で複数の回答者に共通する意味を表している表現をキーワードとして名づける。最後にキーワード間の意味の類似性に基づき構成概念を取り出す。以上のような第二言語による発話データの分析作業について報告する。

## 27. 日本語教員の養成は、グローバル人材の育成につながるか

中川良雄・天満理恵・上野山愛弥 (京都外国語大学)

大学の日本語教員養成課程では、毎年多くの修了生(卒業生)を輩出している。しかし修了生の全員が日本語教員に就くわけではなく、社会の様々な職域に就いていく。本発表では、社会で求められるグローバル人材に必要な資質や能力について考え、日本語教員養成課程修了生がグローバル人材として活躍できる可能性を問う。結果として、異文化理解やコミュニケーション能力を身に付けた課程の修了生こそ、グローバル人材として活躍できる可能性を秘めている。

## 28. 超級話者へのアクセント教育で向上しやすいものと向上しにくいもの

河野俊之 (横浜国立大学)

日本語のアクセントは恣意的であり、それらを身に付けるには、ひとつひとつ覚えるしかないとされる。しかし、母語話者がアクセントを獲得する際、全て個別に覚えているとは考えにくい。そこで、本研究では、超級話者へのアクセント教育の実践について報告する。実践では、まず、学習者本人に発話資料を読ませ、次に、そのモデル音声を聞かせ、自身が発話したと思うアクセントと比較させた。その後、フィードバックを行い、さらに、発話させた。その結果、誤ったアクセントについては、必ずしも維持されないことなどが分かった。また、モデル音声を聞いた際に気づきが起こりやすくなることも分かった。

## 【昼食交流会】

今回は研究会終了後の懇親会の代わりに、午前のポスター発表終了後、1階学生食堂にて昼食交流会を行います。ぜひご参加ください。会費は1000円です。北海道のおいしい食べ物を食べながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

なお、当日は夏季休暇中のため、学生食堂は営業していません。大学周辺には、飲食店が多くあります（ランチマップを用意します）が、混雑も予想されますので、昼食交流会に参加されない場合は、昼食をご持参くださることをお勧めします。近くにはコンビニもあります。

## 【会場案内】

藤女子大学 北16条キャンパス

〒001-0016 北海道札幌市北区北16条西2丁目

<http://www.fujijoshi.ac.jp/guide/access.php>

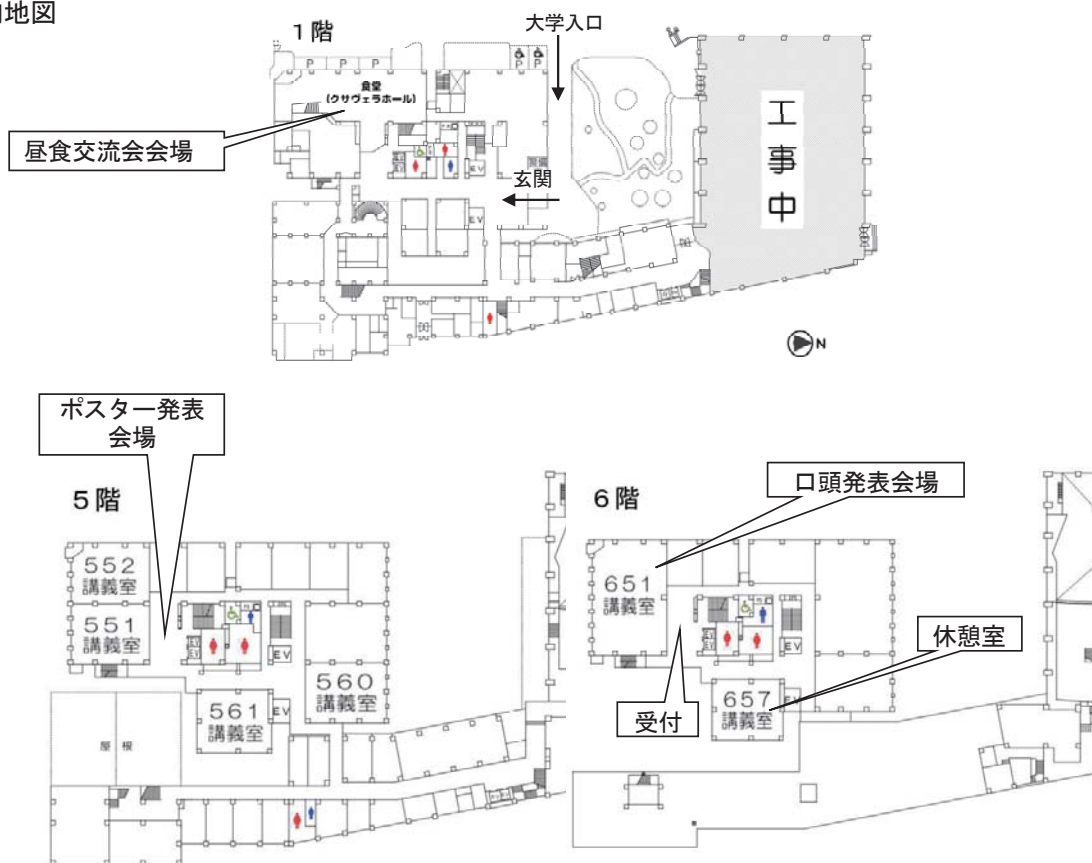


### 構内禁煙

※駐車場がありませんので、お車でのご来校はご遠慮ください。



## ○構内地図



### 【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2014年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がありましたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

- 【振込先】
- (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合  
記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会
  - (2) 銀行から振り込む場合  
銀行名：ゆうちょ銀行  
店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018  
預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能  
口座番号：6907651 口座名：日本語教育方法研究会

